

『改正絵入南都名所記』考 ——絵図屋庄八の小型案内記出版戦略

安宅 望(立命館大学大学院文学研究科 博士課程後期課程)

E-mail gr0465vr@ed.ritsumei.ac.jp

要旨

18 世紀の中頃から奈良で出版活動を始めた絵図屋庄八が編集出版した『改正絵入南都名所記』は、旅行者向け小型案内記の決定版ともいべき画期的なものであった。この稿ではその本文の中から東大寺法華堂、新薬師寺、眉間寺の三か所を取り出し検討を加える。そこにはそれぞれ従来の小型案内記には無かった独自の言説が盛り込まれている。それらの言説を、奈良の価値を高め、さらには自らの商売に利するための編集者絵図屋庄八の戦略であると捉え、当時盛んになっていた寺社の略縁起¹⁾の出版活動と関連させて論じる。

abstract

The "Kaiseieiri Nanto meishoki" edited and published by Shohachi Ezuya, who began his publishing activities in Nara in the middle of the 18th century, was an epoch-making work that could be called the definitive small guidebook for travelers. In this article, I will examine three places in the book: Todaiji Hokke-do Temple, Shin-Yakushiji Temple, and Miken-ji Temple. Each of these temples has its own unique discourse that has not been included in conventional small guidebooks. I consider these discourses as a strategy of the editor, Shohachi Ezuya, to enhance Nara and to benefit his own business, and discuss them in relation to the publishing activities of "Ryaku-Engi¹⁾": a brief history of temples and shrines that were flourishing at the time.

1. はじめに

江戸時代の初期、17 世紀の中頃から政情が安定し人々の生活が活性化するにつれて往来も活発になり、奈良にも多くの人が訪れるようになった。永禄 10 年(1567)10 月松永弾正と三好三人衆との東大寺大仏殿での合戦で焼損し露座になった大仏や焼亡した諸堂にも再建の機運が高まった。その流れの中で奈良見物に便を図る小型案内記の萌芽が見られた。小型案内記は版を改め内容を少しずつ変えながら数種類出版され、やがて『改正絵入南都名所記』(以下『改正絵入』と表記)に収斂していった。筆者は『改正絵入』につながるこれら小型案内記の系譜を先にまとめて発表した²⁾。

その系譜によると絵図屋(井筒屋)の筒井家が新たな小型案内記の出版を志して、それまでに出版された小型案内記を参照しつつ新しい記述を加えながらまとめたのが明和 6 年(1769)版『大和名所記』(以下『大和名所記』と表記)である。さらに挿絵といくつかの追加記事を載せてまとめたのが安永 3 年(1774)版『改正絵入』(図 1)である。

『改正絵入』はその後、確認できるだけで寛政 9 年

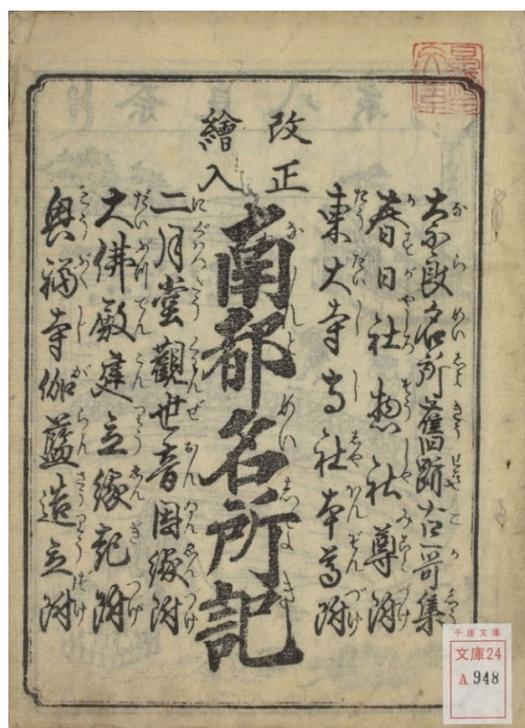


図 1 改正絵入南都名所記 安永 3 年版 表紙
早稲田大学図書館 文庫 24 A0948

(1797)、文化2年(1805)、文政元年(1818)、文政10年(1827)、天保12年(1841)、嘉永5年(1852)、万延2年(1861)と7回の改版を繰り返しながら90年弱の長きにわたり販売されてきた⁶⁾。その間の改版に際しては、挿絵・テキスト共に異同はごくわずかで刊記以外に各版の特徴を抽出することは難しいくらいである⁴⁾。そのように頑固なまでに体裁を変えずに版を重ねた『改正絵入』は江戸時代中期から幕末まで奈良の小型案内記としての地位を独占的に守って来た。奈良を訪れた旅人の多くは半日から一日の奈良見物の際に、案内人を頼み、案内人とともに『改正絵入』に書かれた道筋に沿って歩き、彼の口上によって奈良の数々の物語を聞かされる⁵⁾。そして『改正絵入』或いは同じ絵図屋版『ならめいしよゑづ』を買い求めて奈良名所めぐりの記念としたのである。

そのようにロングセラーとなった要因を探っていく過程で筆者が注目したいのは、この『改正絵入』がそれまでの小型案内記には言及されて来なかった新しい言説を盛り込んだことである。それは東大寺法華堂、新薬師寺、眉間寺の項に顕著に表れている。

加藤基樹氏が指摘するように、近世の寺社略縁起は、一山において共有の縁起を、出版するという方法で市井に流布し積極的に教化するという機能を持っていた⁶⁾。『改正絵入』もこれら三か所の寺院に付加された言説により奈良の「略縁起」たる地位を得て出版物として長い命脈を保ったとは考えられないだろうか⁷⁾。この稿では、上記三か所の寺院の記述が『改正絵入』の中でどのような役割を果たし、それにより奈良における他の追従を許さない小型案内記となっていくのかを検証したい。それにより奈良の霊的優位性を強調し、巡礼を促し、ひいては奈良の繁栄と自分の商売繁盛につなげた絵図屋庄八の編集戦略について明らかにしたい。

2. 『改正絵入』本文の検討

この章では、『改正絵入』の東大寺法華堂、新薬師寺、眉間寺の記述をそれぞれ検討し、その言説の特徴をまとめながら、共通する思想を明らかにする。それは奈良の言説としては中世以来語り継がれてきたものではあったが、近世初期に於いては必ずしも広く認知されていたとは言えない概念であった。検討に使用するのは『改正絵入』の最初の版である安永3年(1774)版である。

2-1. 東大寺法華堂について

『改正絵入』の東大寺法華堂の本文を検討する前に、従来の小型案内記での同堂の記述を比較のために引用する。ここでは前述した『大和名所記』の法華堂の項を引用する。

(以下引用には句点・読点を補記)

▲ほつけだう 世に三月だうといふ。らうべんそうじやうこんりう。本ぞんふくうけんさくくはんをん四天王のそう。東のかたにふどうめう王にしの方におそほさつ。くはうめうくはうごうの御願。うしろ戸にしうこんかうしん。らうべんそうじやうどうのときあんち仏なり。つねにひらくことなし。天慶三年たいらのまさかどほんぎやくのとき。此ぞうたちまちにうせてみへず。廿日あまりへてかへり給ふ此ぞう蜂になりてまさかどのかぶとのてへんよりいり。さしころし給ふとなり。世にはちのみやといふなり。

以上である。平仮名が多く読みにくいが、①三月堂の異名があること。②良弁僧正の建立であること。③本尊は不空羂索観音で東に不動明王、西に光明皇后御願の地藏菩薩があること。④後戸に良弁僧正が童子のときに安置した執金剛神があり秘仏であること。⑤天慶の将門の乱のときに執金剛神は蜂に変化して将門を成敗したこと、などが語られている。従来の小型案内記では上記の内容がほぼ同文で語られている。これが『改正絵入』ではどのような言説が付加され、内容が変わっていくか本文を追いながら見ていく。長い文章なので適宜切りながら検討していく。

▲法華堂 羂索院金鐘寺世に三月堂といふ。

天平五年開山良弁僧正はしめてこんりうの後千有余年にいたりていさゝか水火等の難なし。

最初に法華堂の異名羂索院金鐘寺を追加している。天平5年(733)の創建という言説は『東大寺要録』巻2諸院章を典拠としている。新しい研究では法華堂が不空羂索観音を本尊とし、現在の場所に建立されたのは研究者によって幅はあるものの、天平12年(740)から天平勝宝元年(749)までの間とされている⁸⁾。松村淳子氏は、天平5年は現在の法華堂の場所に金鐘寺が建立された年という仮説を立てている⁹⁾。天平5年は法華堂にとって節目の年であったことは間違いない。

それ以来、水火の難に遭わないというのは事実で、東大寺では転害門・正倉院と並んで最古の建造物である。これは従来にない新しい情報である。

続いて、

本尊不空羂索観世音ぼさつ、良弁僧正の御作脇士日光月光梵天帝釈四天王等は行基井の御作。正面御づしの弥勒井は良弁御自作の念誦仏。地藏井は弘法大師、不動明王は勤操僧正の御作。此両仏の御まへにて興正井大悲井自ら誓受の願を発し給ふ。

東大寺創建に関わった良弁僧正・行基菩薩が法華堂の中心となる仏像群を制作したことになる。法華堂についてこのように仏像を列挙して作者を明記することは、これまでの小型案内記はもとより、『南都名所集』(延宝3年1675序)『奈良名所八重桜』(延宝6年1678刊)『和州旧跡幽考』(延宝9年1681刊)といった名所記にも無かった新機軸である。堂内に林立する仏像について良弁僧正・行基菩薩・弘法大師・勤操僧正

などと絡めて個別に案内するというのは、歴史的な正否は別にして参詣者へのサービスであり、奈良の価値を高める一つの手段であったと考えられる。

また、地藏菩薩・不動明王の前で興正菩薩(叡尊)、大悲菩薩(覚盛)が自誓受戒を行ったことはこれまで言及した名所記等には出てこない。しかし、嘉禎2年(1236)叡尊・覚盛らの法華堂における自誓受戒はよく知られた出来事であった¹⁰⁾。菩薩の諡号を天皇からいただいた高僧に触れるのも奈良の霊的優位性を強調する一環であろう。続いて、

天平十二年聖武天皇四十の御賀として当堂におゐて新羅の審祥大徳を請じ初て華嚴経を講せられしに、紫雲たなびき本尊の眉間より金色の光を放ち給へり。帝叡感のあまり終に良弁僧正に勅し金銅十六丈の毘盧舎那の尊像を鑄給へり。初て大伽藍を建立し給ふ。誠に当寺最初の霊場鎮護国家の勝跡也。

ここでは華嚴講の始まりとそれがきっかけとなって大仏建立が成ったことが書かれる。良弁僧正が新羅の審祥を請て華嚴経を講じたことは『東大寺要録』第五東大寺華嚴別供縁起に書かれている。また、『東大寺縁起絵詞』第二巻11段にも金鐘寺に関する記述がある¹¹⁾。そこには、

天平十二年庚辰十二月十八日聖武天皇四十御賀ニ彼審祥師ヲ請シ高僧ヲ集テ金鐘寺花嚴経ヲ講セシ時、紫雲聳テ祥瑞ヲ顯キ叡感ノ余花嚴ノ別供ヲ施入シ給シカハ有智高徳ノ学徒タエス。

とあるが、この華嚴講が直接大仏建立のきっかけとなったという言説は見えない。華嚴経の講釈は3年続き、終了した翌年天平15年(743)に大仏建立の詔が出される。管見の限り、華嚴講と大仏建立とを直接結びつけた言説はこの『改正絵入』のオリジナルではないかと考えられる。そこで、前述の水火の難を受けていないという話も加えて、当寺最初の霊場、鎮護国家の勝跡という文言が導き出されるのであろう。

次に語られるのは執金剛神像である。秘仏なので実際に拝んだ人はほとんどいないはずだが、どの名所記でも執金剛神の靈験に多くの行数を割いている。東大寺参詣の人々の関心を大仏の次に引き寄せたのは見ることのできないこの霊像であった。『改正絵入』の本文を読む。

後戸等身の執金剛神は秘仏にして良弁僧正の本尊。靈験殊に勝れ、天慶年中平の将門乱の時尊像大なる蜂に変化し将門をさす。此冥助によりて終に将門誅せられし也。故に世の人蜂の宮と尊称して信仰殊にあつし。委は本縁起并に白河院御巡礼記等に見へたり。(法華堂項終)

この執金剛神が蜂に変化して将門を誅する話は古くから伝えられており、平安時代後期嘉承元年(1106)に書かれた大江親通『七大寺日記』にも将門調伏の話と共に「執金剛神可見」の文言がある¹²⁾。『東大寺要録』

竊索院条にも「頂髻右方之蝮切落」しているのは「古老相伝云」将門を誅するためにその部分が大蜂となって飛んでいったと書かれている¹³⁾。

『日本霊異記』中巻第21¹⁴⁾によると、金鷲優婆塞と名乗っていた出家前の良弁が、執金剛神像の脰脛に縄をかけて結び日夜仏道修行をしていたという。その脰脛から光を放ち、それが皇居に届き、その光に導かれて聖武天皇が初めて金鷲優婆塞(後の良弁僧正)と出会うことになる。法華堂を語る時、執金剛神像の説話は聖武天皇と良弁僧正との出会いのきっかけであり、必ず触れなければならない物語であった。

その後の蜂の宮の話は天慶の乱がいかにか当時の人を驚かせた国難であったか、それを調伏した執金剛神の靈験が驚異的であったかという視点で語られる。これも聖武天皇と良弁僧正が信仰した執金剛神の靈力が約200年後でも衰えを見せず依然として盛んであることを証した言説である。

最終行にある「本縁起」とは『東大寺執金剛神縁起』、「白河院御巡礼記」とは『東大寺要録』巻四諸院章第四竊索院条に引用されている「白河院高野巡礼之日記」のことであると思われる¹⁵⁾。

『改正絵入』の法華堂の記述は15行を費やし、語られる良弁僧正と聖武天皇の伝承は古来さまざまな書籍に取り上げられた非常に有名なものであった。そして『改正絵入』では審祥大徳の華嚴会の話で大仏建立のきっかけとして新たに追加した。華嚴講と大仏建立を結びつけることで聖武天皇と良弁僧正のゆるぎない関係を強調し、この後に出てくる大仏殿の前提としてその関係の具体例を示して補強したい、という絵図屋庄八の意図を読み取ることができる。さらに菩薩の諡号を持つ叡尊・覚盛の話を加えることで法華堂の霊的な地位を高めている。

2-2. 新薬師寺について

『改正絵入』には、3名所(春日社・東大寺・興福寺)を回る道筋とは離れて5か所の寺を紹介している。阿闍寺、般若寺、元興寺、新薬師寺、眉間寺である。小型案内記にこれらの寺が追加された変遷を見ると、『南都名所道筋記』(貞享元年1684刊)には元興寺のみ。『南都名所記』元禄15版(1702)・宝永5版(1708)には元興寺・般若寺。『大和名所記』には前記2寺に阿闍寺が追加された。いずれも各寺の紹介は同文である。元興寺は聖武天皇所縁ではないが、江戸時代は東大寺堂衆の支配を受けた東大寺の末寺であった。般若寺、阿闍寺はその創建に聖武天皇、光明皇后が関わっているという言説が紹介される。

そして『改正絵入』には新薬師寺と眉間寺が更に追加された。この節ではまず新薬師寺の記述を検討し、この寺が追加された意味を考察する。適宜区切りながら引用する。

▲新薬師寺 夫新薬師寺は聖武皇帝勅願によ

つて行基ぼさつ再興の所也。昔時香薬師寺と号して秘仏御長三尺余の薬師います。是すなはち聖徳太子の御作にて黄金の尊像なり。

新薬師寺の創建については、現在の研究では聖武天皇の天平 17 年(745)から 19 年(747)にかけての御不予平癒をために光明皇后の御願によって建てられたとされている¹⁶⁾。しかし、『改正絵入』では聖武天皇勅願によって行基菩薩が再興した寺であること。それ以前に香薬師寺という寺があり、聖徳太子作の秘仏で三尺の黄金の薬師如来が本尊であったことが書かれている。『改正絵入』の新薬師寺創建の記事には、元になる別の縁起が存在することが伺われる。続いて、

天平十七乙酉の秋光明皇后眼翳を患させ給ひて玉体ゆたかならず。故に帝誓願のかけさせ祈給ひしかば、則速に御平癒あり。其時行基ぼさつに命じいれ新に薬師丈六の座像を造立せらる。今の本仏の薬師如来是也。此時寺号を改め給ひて新薬師寺と勅額を下し給ふ。則靈驗日々に新なるとの意也。故に此尊の慈眼殊に大なるは皇后の病眼速に御平癒を顕し給ふ亀鏡なり。むかしの香薬師如来は今にいたり秘仏にてまします。其外諸堂本尊の縁起有之といへども爰に略するもの也。(新薬師寺項終)

よく知られた新薬師寺創建縁起は『東大寺要録』第一冊本願章天平十九年の条に「十九年丁亥三月仁聖皇后。縁天皇不予。立新薬師寺。造七仏薬師像。」とあるのを根拠とした聖武天皇の病気平癒のため光明皇后が建立したという話である。それまでに出された奈良の地誌・名所記にも等しく聖武天皇の眼病平癒のために建立とあり、本尊薬師如来の大きな目も眼病平癒のため特に「きらきらしく」造られたとある¹⁷⁾。『奈良名所八重桜』だけは膏薬寺という名で載っており、建立縁起について記述が無い。

新薬師寺には江戸時代に書かれた『新薬師寺縁起』という巻子がある。これは元禄 13 年(1700)、大和長谷寺出身で徳川綱吉の護持僧であった護国寺前大僧正隆光の筆になるものである。中世以来本格的な修繕もままならなくなった新薬師寺の復興を志した新薬師寺奥坊原住舜清が、学友であり將軍の帰依を受けていた隆光に頼み、徳川綱吉の生母桂昌院から黄金 6 枚を下賜された。それを使って元禄 12 年、伽藍・本尊・十二神将の修理を行うことが出来た。『新薬師寺縁起』は將軍家の助力によって再興成った新薬師寺がその感謝を込めて作成したもので、新薬師寺の創建縁起から変遷、境内各堂の由来などが書かれている。その内容を読むと『改正絵入』の言説が『新薬師寺縁起』を下敷きにしていることは明らかである。本文に関連する『新薬師寺縁起』の記述を引用する¹⁸⁾。

夫当寺者。(中略)聖武皇帝彫金玉宮此梵宇。至孝謙帝大成功畢。抑昔時、聖徳興建一宇号香薬寺。其地在当寺之西南一里計。手自以黄金鑄治

医王薄伽之尊像安置之。堅閉宝龕。(中略)天平乙酉之秋。光明皇后有翳眼之惱。皇帝愁之帰彼秘尊。祈其除鑄愈応願忽差。於此撰於勝地。移于此処結構伽藍。使行基菩薩刻丈六薬師如来以為本尊。(中略)凡如来面貌開青蓮慈悲之眼。現柔和端嚴之相。然当時本尊慈眼殊大也。正是、皇后病眼速有応驗之亀鏡也。此日改寺号而賜勅額。称日輪山新薬師寺。(中略)是則靈驗日新之新也。

これを読むと、聖武天皇が建てた梵宇(仏寺)であること。その昔、聖徳太子が作った香薬寺という寺が現在の新薬師寺の場所から西南に 4 キロばかり行った所にあり、そこに太子自作の黄金の薬師如来像があったこと。それは秘仏であったこと。光明皇后が眼を患い、聖武天皇がその秘仏に平癒祈願をしたところ、忽ち治ったので、天皇はこの地を選び伽藍を建て行基菩薩に命じて丈六の薬師如来像を造らせ本尊としたこと。その眼が特に大きいのは皇后の眼を速やかに治した証拠(亀鏡)であること。この寺の寺号は新薬師寺とし、勅額を賜ったこと。この「新」は靈驗が日々新たなるという意味であること。以上『改正絵入』の本文に対応する言説が余すところなく『新薬師寺縁起』に書かれている。

絵図屋庄八は『東大寺要録』などに書かれて地誌に引かれている縁起ではなく、当時最新の言説であった『新薬師寺縁起』を選んだのである。そこには聖武天皇と行基菩薩の関係、光明皇后の眼病を速やかに治した香薬師如来の靈驗が書かれている。秘仏にして強力な靈驗を持つ仏像を紹介するのは法華堂の執金剛神像と同じである。

『改正絵入』に『新薬師寺縁起』を採用した絵図屋庄八の意図はどこにあったのだろうか。一つは聖武天皇中心の縁起であること、もう一つは將軍家との関係に於いて成った縁起であること、が考えられる。想像をたくましくすれば、東大寺勸進所詰という役割を持っていた絵図屋庄八は、その人脈を利用して当時東大寺の末寺であった新薬師寺の縁起を見ることが出来たのではないだろうか。その内容を知り、聖徳太子・聖武天皇・行基菩薩所縁であり、さらに將軍家(幕府)の庇護を受けた目出度い寺であることを強く打ち出したい、と考え新薬師寺の項を敢えて設けたのであろう。

2-3. 眉間寺について

『改正絵入』最後の項は眉間寺(図 2)である。眉間寺は聖武天皇創建の縁起を持ち、その御陵を守る寺として存在した。明治の廃仏毀釈によって眉間寺は廃寺になってしまったが、江戸時代では相当に重んじられた寺であった¹⁹⁾。絵図屋庄八が眉間寺を『改正絵入』の最後に載せた理由を、本文を検討しながら考えたい。

▲佐保山眉間寺 夫当山は人皇四十五代聖武皇帝の御願、則御陵所。行潜僧都の開基なり。

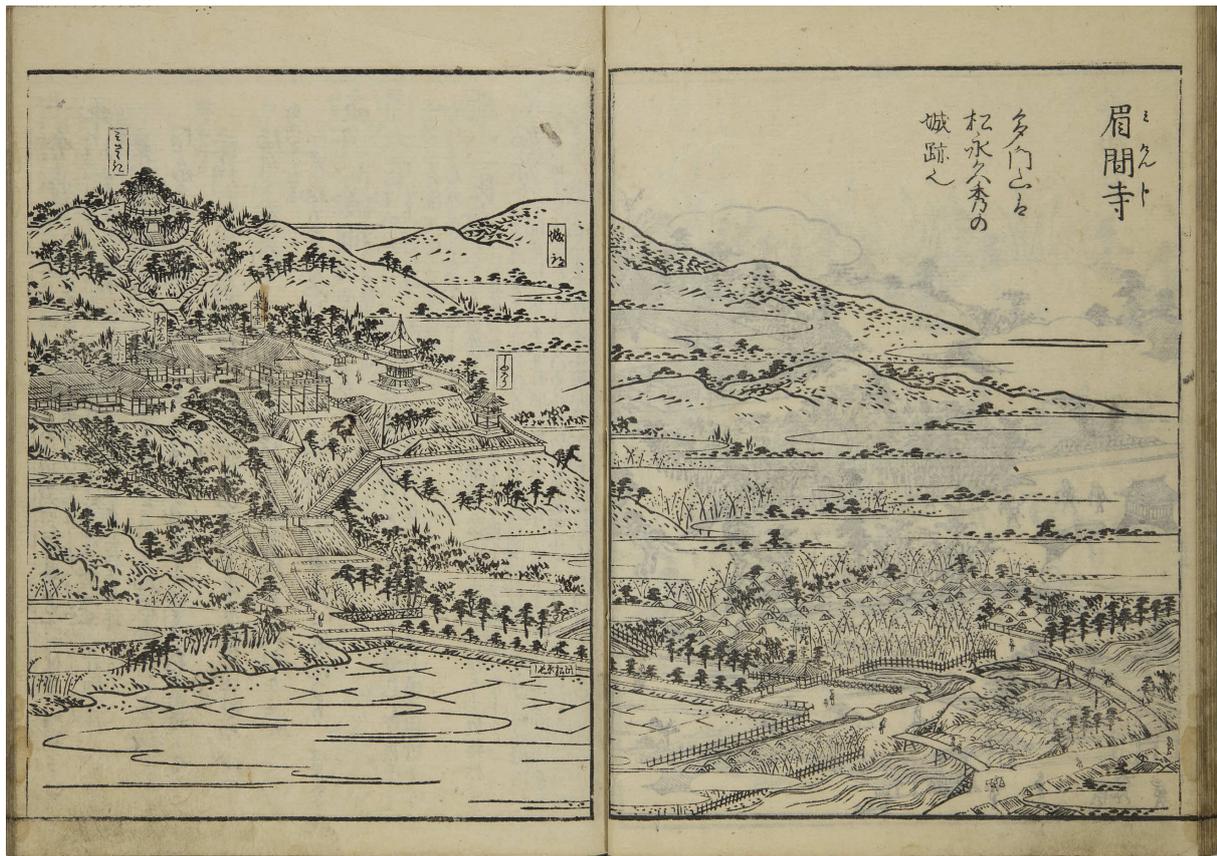


図2 大和名所図会 2巻 寛政3年 19丁ウ 20丁オ
立命館大学アート・リサーチセンター中井文庫 nakai2604-2 21

天皇東大寺大仏殿へ行幸有し時、此佐保山殊勝の靈地なる間、御母公藤原の后宫の御為に勅詔ありて伽藍を造築し本堂中尊阿弥陀如来は則帝御等身、右薬師左釈迦如来おの／＼行基菩薩御彫刻也。

佐保山は奈良の北側にある小高い山である。この山に聖武天皇・光明皇后の御陵がある。眉間寺はまず聖武天皇の御願であり、廟所でもある特別な寺であることが書かれる。開基行潜僧都は、天平勝宝6年(754)鑑真和上が受戒を受けた聖武天皇以下皇族方、沙弥、僧達の中に行潜という名前が見えるので、その人のことであろう²⁰⁾。この寺の本尊は阿弥陀如来坐像で、左右に薬師如来と釈迦如来の坐像を持つ三尊並座という珍しい形で安置されていた。廃寺後東大寺に移されたそれは行基作とあるが、平安時代(12世紀)のいわゆる定朝様式の阿弥陀如来坐像である²¹⁾。続きを記す。

初は眺望寺と号す。伝に皇帝此山に御臨幸御遠見宜かりし故眺望寺と勅額賜也。然るに長寛年中村上天皇御宇御廟の前に化人現じ眉間より光明を放事半時斗有て化す。其跡に舍利式粒あり。此由速に奏聞に及べり。帝奇特の事叡感ありて眉間放光の瑞相を以眉間寺と勅額を賜ふ。

眉間寺については、『改正絵入』以前に出た名所記・地誌等に漏れなく書かれているが、建立の縁起を『改正絵入』ほど明確に記しているものは無い。『大和志料』

(大正3年1914刊)が引用している南都薬師院氏蔵「佐保山眉間寺住持次考」²²⁾という史料があるが、それによると舍利が出現し、眉間寺の勅額を賜ったのは村上天皇の天徳2年(958)4月2日のことである。「長寛年中」は1163年から64年のことであり、二条天皇の御宇である。単純な誤記のように思うが、『大和名所図会』(寛政3年1789刊)の眉間寺の項にも「長寛年中村上天皇の御宇化人現れ眉間より光明云々」という記事があり、たとえ誤記にしても何か典拠になる資料があったものと思われる。『日本紀略』後編四、村上天皇条²³⁾の天徳期の記事にも該当するような出来事への言及は無い。

これらの縁起は史実を踏まえたものではないが、先に眺望寺という名前であったものを眉間寺と改称したのは事実であり、そのきっかけに何か神秘的な出来事があったことが窺われる。このように眉間寺を巡る言説は史実と伝説が渾然としており、寺自体も廃寺となって跡形も無いので、その実態は杳として掴みがたい。『改正絵入』の眉間寺縁起の言説は、ほぼオリジナルと言って差し支えない。本文の続きを引く。

聖武皇帝は観音の化身なりといへり。千歳の星霜を経といへども靈徳不朽なるゆへ国に凶事あらん已前には御陵かならず鳴動す。寔に行基菩薩薩羅門僧正良弁僧正次のごとく文殊普賢弥勒并の変作にて四聖同時出世仏法の洪基、実に尊崇し

奉るべき事なり。太子殿は八百年来建物多く宝塔
観音堂おの／＼五六百年廻祿の縁なし。殊勝の
靈山成事然るべし。委は本縁起に問べし。(眉間
寺項終)

眉間寺は聖武天皇創建の縁起を持ち、御陵の守り寺
として永く繁栄してきた。絵図屋庄八は『改正絵入』の末
尾にその眉間寺を配置し、最後に東大寺創建に関わ
った4人の聖人、すなわち聖武天皇、行基菩薩、婆羅
門僧正、良弁僧正を本地仏と結び付けた四聖伝承で
締めくくろうとした。

四聖伝承の成立ちについては藤巻和宏氏の詳細な
研究²⁴⁾があるが、東大寺・大仏創建に縁のあった多く
の人々の中で、特に聖武天皇：救世観音、行基菩薩：
文殊菩薩、婆羅門僧正：普賢菩薩、良弁僧正：弥勒菩
薩、と本地仏を結び付け、四聖同時出世の因縁により
東大寺・大仏が成ったとする言説である。その言説の
初出は『南都巡礼記』(別名『建久御巡礼記』)の東大
寺条である。この本は建久2年(1191)12月、后宮の
位にあった御方が大和の諸社寺を御巡拝されたときに
僧実叡をしてその顛末と諸社寺の縁起を記せしめたも
のである²⁵⁾。東大寺条には

開眼導師 天竺并僧正化人 供養導師 隆尊律
師 讚師 延福禪師 咒願 大唐道璿律師化人
大施主 聖武天皇救世観音 良弁僧正弥勒婆羅
門僧正普賢 行基菩薩文殊也

カヤウノ権者トモノアツマリテ造供養セラレシ也

という一節がある。明確に四聖とは書かれていないが、
聖武天皇以下の4人には本地仏が記され特別視して
いる。この巡礼記が書かれた当時既に四聖人に本地
仏を習合させた四聖同時出世の因縁が東大寺で認知
されていたことを示している。

その後、東大寺の諸々の縁起を集大成した『東大寺
縁起絵詞』20巻170段²⁶⁾が13世紀末から14世紀初
頭に制作され、その第1巻の巻頭には

夫南閻浮提大日本国総国分寺東大寺ハ四聖同
心ノ草創三代勅願ノ花界也(中略)本願皇帝救世
観音ノ一化也 普門ノ功德ヲ開テ叡願ヲ晨昏ニ廻
知識行基ハ并覺母ノ文殊再誕也。(中略)菩提僧
正ノ普賢(中略)良弁僧正ノ弥勒タル金光ヲ放テ玉
体ヲ照今此四聖蓋是花蔵男会四行薩埵靈山浄土
上足并也。

とあり、四聖同心によって東大寺が成ったことが語られ
る。この20巻170段の縁起は内容も時系列も散漫で
巻頭から読んで東大寺の歴史が年表的に理解できる
というものではない。その煩雑さを東大寺でもわかって
いたようで、天文5年(1536)にこの『東大寺縁起絵詞』
の重要な部分を抄出し、時系列も整理した『東大寺大
仏殿縁起』上・中・下²⁷⁾が成立した。これは芝琳賢が絵
を描き、詞書を上巻は後奈良天皇、中巻を同天皇の
弟青蓮院二品尊鎮親王、下巻を後奈良天皇・尊鎮親
王の従兄弟にあたる東大寺別当寺務公順が書いた豪

華な絵巻物である。その巻頭も四聖同時出世の因縁
から始まる。

夫南閻浮提大日本国惣国分寺東大寺は聖武皇
帝救世観音の化現として叡願を凝四聖同心の草
創也其由来をいへば、むかし釈尊鷲峰説法の砌
普賢文殊観音弥勒等の薩埵衆生利益のはかりこ
とをめぐらし四聖同時に出給へり

本願皇帝救世観音 行基は覺母文殊

菩提僧正は普賢 良弁僧正は弥勒

この四聖伝承は中世から室町時代にかけて東大寺の
バックボーンとなり、鎌倉時代には四聖坊が作られ四
聖人の図像が祀られ四聖講という供養が行われた。し
かし、東大寺が永禄10年(1567)の東大寺大仏殿の合
戦で大仏殿や四聖坊を含めた諸院が焼亡した後は、
寺勢は衰え、江戸時代に入っても大仏は露座のまま、
焼亡した堂宇の再建もままならなかった。

東大寺が再興の兆しを見せるのは17世紀も後半に
なった貞享元年(1684)、公慶が大仏殿復興・諸国勸
進の許可を幕府に願ったところから始まる。公慶は諸
国勸進のために『大仏殿縁起』のと図柄と詞書を版本
にして利用した。天明3年(1783)の奥付を持つ『東大
寺大仏殿縁起』²⁸⁾の版本(図3)の末尾には、

大仏殿縁起旧板当院鼻祖公慶上人住職之

時雖清須義氏寄附之既紛失而不存矣

とあることで、それがわかる。その内容は荒唐無稽と言
ってもよい不思議な言説に満ちているが、中心となる
のは四聖同時出世の因縁により、神仏の冥助を受けな
がら大事業を成し遂げていくという物語である。

公慶の努力が報われ、諸国勸進と幕府の援助によっ
て元禄5年(1692)に大仏の開眼供養が行われ、宝永
6年(1709)に大仏殿の落慶法要が行われた。

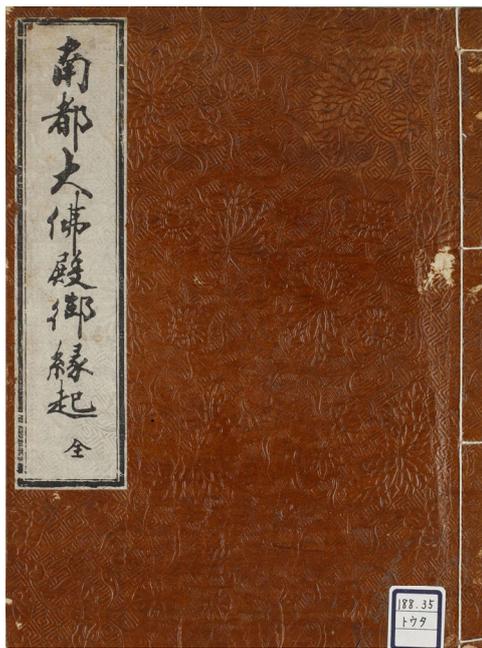


図3 東大寺大仏殿縁起版本 表紙 天明3年
奈良県立図書情報館 DIG-NAKT-12

この四聖伝承は公慶が大仏殿勧進のために持ち出して以前には名所記・地誌等に明記されることはむしろ少なく、『和州寺社記』(寛文6年1666序)の東大寺の項に大仏が完成して開眼供養について書かれている最後に、

大施主聖武皇帝は救世観音の化身 天竺の菩提は普賢の化身 行基菩薩は文殊の化身良弁法師は弥勒の化身かやうの聖者あつまり給ひ万事吉祥して東大寺と名付給ふ

とあるのが目立つくらいである。とはいえ、いずれの名所記・地誌に於いても東大寺創建に関わる四聖人の言説は、古くから伝えられ『東大寺縁起絵詞』『東大寺大仏殿縁起』に収めたものを踏まえて、四聖同時出世の因縁を前提として語られる。

大仏殿復興前後に出版された小型案内記には四聖同時出世の因縁を明記したものは無かった。その中で『改正絵入』の本文は小型案内記としては初めて四聖同時出世の因縁を語り、千年の時を経ても霊徳は衰えないことを強調する。それが故に国に凶事が起きる前に御陵はかならず鳴動すると説く。凶事が起きる前に御陵が鳴動するという話は『奈良名所八重桜』にも紹介されている。眉間寺の項に「南都に悪事あらんとては必御廟鳴動す」とある。『改正絵入』では「国に凶事あらん已前」となっている。聖武天皇の霊徳が時を経ても衰えないのは、法華堂の執金剛神と呼応し、南都の地が仏法を興隆させた四聖の集った場所として特別に尊いことを示す証なのである。

その聖武天皇の霊徳の元、眉間寺の諸堂は奈良には珍しく廻禄(火災)の歴史が無く、繁栄を続けている。奈良という土地自体が仏法に護られ、その霊徳は日本全土を覆うのである。

絵図屋庄八が新たに編集した『改正絵入』はそれまでの小型案内記にあった春日社・東大寺・興福寺の3名所の道筋案内といくつかの伝説を淡々と述べる、という体裁から一步踏み込み、四聖というキーワードを踏まえた縁起を強調し、南都の地がより祝福された霊地であることをわかりやすく示そうとした。

聖武天皇・光明皇后の御陵がある佐保山で『改正絵入』が終わるのは偶然では無く、そこに絵図屋庄八の明確な意図があった。南都巡りの道筋からはやや外れるが、南都が特別の霊地であることを証するために最後に眉間寺を選んだのである。

3. 絵図屋庄八の編集戦略

以上、『改正絵入』に増補された東大寺法華堂、新薬師寺、眉間寺の本文を精査し、そこに込められた編集者である絵図屋庄八の意思について個別に検討した。この章では新たな小型案内記に見物の道筋とは必ずしも言えない寺院を追加してまで四聖同時出世の因縁を盛り込んだ絵図屋庄八の編集戦略を考える。

3-1. 絵図屋の成立と奈良のにぎわい

絵図屋を営んできた筒井家の年譜²⁹⁾によると、初代絵図屋庄八が東大寺勧進所詰として働きながら、本格的に書肆版元として商売を始めたのは寛保年間(1741~1744)である。その頃は従来からあった絵図や小型案内記の改版を販売していたようだが、明和6年(1769)、『大和名所記』の出版を期にオリジナルの小型案内記の出版に乗り出し、安永3年(1774)に満を持して『改正絵入』の出版を行った。明和6年から安永3年までの5年間に『改正絵入』の出版を企図したのである。絵図屋庄八は安永8年(1779)に61歳で死去しているので、死の5年前56歳の時のことである。

安永年間は大仏・大仏殿が再興して70年程経ち、奈良は順調に旅行客を集めていた。当時は全国から伊勢神宮を目指して多くの人が動いた。平年の参宮人数は20万から50万と言われる。また所謂おかげ参りが周期的に流行し、参拝者数は年間で200万から500万人に達した。東国からの参宮者の多くは伊勢参りの後に奈良を訪れ、奈良町見物を半日或いは1日かけて行い、その後吉野・大坂などへ足を延ばした。一方西国の参宮者は、大坂・京都方面から奈良に宿泊してから伊勢を目指した。『奈良市史』によると、明和8年(1771)のおかげ参りの時、4月26日から5月14日までの19日間の奈良町に於ける1日平均宿泊者数は約8万人、最も多い日は18万人強の宿泊者を受け入れている³⁰⁾。東国からの旅行者は伊勢参宮を終えて、西国からは参宮の途中で奈良に宿を取り、名所の多いこの地を短時間で要領よく見物したいという要求があったことと思われる。奈良は伊勢に次いで信心深い善男善女が集う町として全国に認知されつつあった。

3-2. 絵図屋庄八の小型案内記編集戦略

奈良見物は猿沢池からスタートして春日社、若草山、法華堂、二月堂と廻り、大仏参拝をハイライトとして、興福寺の境内を巡り、南円堂を経て猿沢池に戻ってくるのが標準的な道筋であった。これは当に『改正絵入』に書かれている通りである。この道筋自体は『改正絵入』のオリジナルでは無く、最も早い時期に版行された『南都名所道筋記』(貞享元年1684刊)に記されたものを踏襲している。この道筋を案内人と共に廻るのが最も要領よく奈良見物が出来る方法であった。

案内人の口上は、恐らく地誌・名所記に書かれた文言をなぞりながら、所々で縁起や霊験についての言説を交えたものであったと思われる³¹⁾。絵図屋庄八がおかげ参りの余波でにぎわう奈良に於いて、新しい小型案内記を工夫しようと考えた時に、その念頭にあったのは、そういった案内人の口上で使われる縁起の類ではなかったらうか。

17世紀の後半から有名寺社では略縁起と呼ばれる小冊子や摺物が積極的に版行されるようになった。自らの寺社の由緒・正統性・霊験等を版行することで世

に知らしめ、参詣者の増加を図りそのブランドイメージを高めた。そうすることで、寺社の縁起は版本・摺物というメディアを通して外部へ流通し、さらに地域を跨いで全国へ広まっていった³²⁾。その縁起の言説が読む人を楽しませ、尊崇の念を呼び起こし寺社の位置づけを高めるためには、そこに登場する人物や神々、モノや現象が当時の人々の知識のスタンダードと合致していることが必要になる。その意味で奈良は歴史上の有名な人が数多く集った場所であり、積みあがった言説の量が他の地域と比べて圧倒的に多い特異な地である。

そこで絵図屋庄八は、自らの商売を継続的に発展させるために、非日常を楽しむ大勢の旅行者に奈良の略縁起を提供し、奈良の霊的な優位性を強調し、他地域との差別化を図ろうとした。小型案内記の略縁起化は、既にある小型案内記のように道筋を案内するだけでは不十分である。それは連綿と受け継がれてきた霊的なバックボーンを前提に再構成されなければならなかった。そして奈良にはそのような人物と言説が豊富にあった。東大寺の勸進所に詰めていた絵図屋庄八は、東大寺に関する縁起を奈良全体に敷衍し、聖武天皇以下の四聖の事蹟を取り出した。四聖同時出世の因縁を東大寺だけに留めず、奈良全体の価値向上につなげたのである。

大仏・大仏殿再興の勸進のため公慶は『東大寺大仏縁起』を版本に焼き直し、それを使って絵解きを行った。旅行者は実際に東大寺に来て大仏を拝んでみれば、その巨大な姿に感じ入り、神仏の加護がなければ到底成し得ないと素直に思ったことだろう。絵図屋庄八は『改正絵入』を読ませることで、旅人が大仏を見て感じた驚きを上手く掬い取り、その強烈な印象を東大寺創建に関わる四聖と結び付け、その同時出世の因縁が奈良を更に霊的に勝れた地である証としている。そして旅行者がそれを故郷へ持ち帰り、奈良をめぐる不思議な言説を土産話にすることまでを想定していたのだろう。

絵図屋庄八は、大仏建立という前代未聞の大事業を四人の聖人が現れて、神仏の加護を受けながら成し遂げる、そしてその霊徳は今でも日本を護っているという物語を『改正絵入』という小型案内記に組み込んだのである。それはつまり、小型案内記と略縁起との融合である。絵図屋庄八が目論んだ通り、この『改正絵入』はその後も内容を変えずに版を重ね幕末まで奈良の小型案内記の最終形として販売され続けたのである。

4. むすびにかえて

『改正絵入』の本文から絵図屋庄八の編集戦略を探ることを試みてきた。それは小型案内記と略縁起を融合させ、奈良が天皇家と幕府の双方の加護のある特別な地であることをわかりやすく四聖伝承という言説を下敷きにしながら説いたことである。絵図屋庄八は東

大寺の勸進所詰めというもう一つの立場を利用して追加した言説によって、従来の小型案内記に新しい役割を付与したのであった。その行為を敢えて編集戦略と名づけるのは、絵図屋庄八がどこまで意識的であったかは別にして、近世中期から盛んになった略縁起の出版活動、おかげ参りなどの影響で大勢の旅行者でにぎわう奈良町、何よりも当主として自分の家業を永續させること、そして東大寺の勸進所詰めというもう一つの職務、そういった背景から編集・出版されたのが『改正絵入』であると結論付けられるからである。

その『改正絵入』は結果として幕末までの長きにわたり奈良に於ける唯一の小型案内記の地位を保ち、旅行者によって全国に持ち帰られ³³⁾、その言説は江戸時代を通じて奈良の霊的優位性を明らかにして、他地域との差別化を図り、次の旅行者を呼び寄せ、奈良町の繁栄に寄与したのである。

戦略という意味でもう一つ考えるべきは、これまでの小型案内記には無かった挿絵についてである。『改正絵入』の挿絵は6枚、興福寺・春日社・東大寺それぞれ2枚ずつの挿絵がある。これを挿入したことも大きく言えば絵図屋庄八の編集戦略の一つである。稿を改め挿絵の典拠と意味を論じたい。

『改正絵入』の独自性を更に考察するにあたり、当時の京都・鎌倉の小型案内記との比較、また明治期に出た奈良の各種名所案内の冊子との比較検討も新しい視点を与えてくれるものと考えている。今後の課題としたい。

[注]

- 1) この稿で論じる「略縁起」の定義と考え方を整理する。ここで言う「略縁起」については中野猛著山崎裕人・久野俊彦編『略縁起集の世界—論考と全目録』(森話社、2012年11月)にある中野猛「略縁起の世界」における見解に準じている。すなわち、「略縁起とは、今の寺社で出しているパンフレット類の近世版といえるもので、その内容は「寺社創建縁起、神・高僧伝・仏像縁起・宝物目録・宝物縁起・霊験譚・法会縁起・勸進文・経典解説・祭典解説・事件実録・寺図・お守り縁起・観光案内・災害記録・地誌」を含んだものである。そしてこれらの言説は「伝承自体は寺社側が管理し」「寺社側の深い関与のもとに作られた」と考えられている。『改正絵入南都名所記』は寺社作成ではないが、その内容は上記のコンテンツのかかなりの部分を包含したものである。
- 2) 拙稿「近世奈良における小型案内記 系譜化の試み」(『アート・リサーチ』vol21, 2021年3月, p. 5-17.)
- 3) 吉海直人「絵図屋庄八について」(同志社女子大学学術研究年報4, 1993年11月, p. 84.)〈絵図屋関係出版物〉より。
- 4) 安永3版と次に出た寛政9年版とでは挿絵の構

- 図が異なっている部分が数か所見られるが、本文に於いて東大寺・興福寺の寺領の数字が異なっている他はほぼ同じである。寛政9年版から以後の本文の異動は皆無である。絵図屋の末裔である筒井家に遺された版木の状態から判断すると絵図屋は改版の際、刊記以外の版木については破損等の特別なことが無い限り新たに起こすことはしなかったようだ。(『筒井家史料(版木・銅版)』(『奈良市歴史資料調査報告書』14, 1997年)参照。
- 5) 奈良見物の案内人については、山田浩之「近世大和の参詣文化」(『神道宗教』146, 1992年3月)に概略が紹介されているが、その実態についてはまだ研究が進んでいない。
弘化3年(1846)から嘉永4年(1851)まで奈良奉行を勤めた川路聖謨の日記『寧府紀事』(『川路聖謨文書』2~5(日本史籍協会、1933年)の嘉永元年(1848)4月26日条に案内人(日記では案内者)について言及がある。それによると、当時は70人ほどそれを稼業としているものがいたが、「官方の築地わきへ田舎ものゝ小便するをみつけておどし銭をとり強て案内者になりて銭を貪る種々の悪法ある」ことが度々あり、案内人の評判も悪いので頭取を白洲に呼んで注意を与えた、という記事がある。
 - 6) 加藤基樹「近世寺社縁起の戦略性-三河国鳳来寺縁起を事例として」(『近世略縁起論考』和泉書院、2007年、pp. 55-77.)の「四 近世寺社における「略縁起」の戦略性」より。
 - 7) 中野猛著山崎裕人・久野俊彦編『略縁起集の世界-論考と全目録』(森話社、2012年11月)所収の「中野猛収集略縁起集目録」の大和の項に通し番号554、556、557に『改正絵入南都名所記』が上がっている。
 - 8) 松村淳子「東大寺法華堂創建小考」(『古代学』第4号、2012年3月、pp. 34-42.)「1. 研究史と問題点」より。
 - 9) 注8同論文「おわりに」より。
 - 10) 大谷由香「入宋僧俊苾と南都戒律復興運動」(『印度學佛教學研究』65巻2号、2017年、p. 81.)の「はじめに」に以下の文章がある。「嘉禎二年(一二三六)、覚盛(一一九四~一二四九)・叡尊(一二〇一~一二九〇)ら四名が東大寺竊索院で自誓受戒を行い、比丘となったと宣言したことは、戒律復興運動のハイライトとしてたびたび語られる」。
 - 11) 小山正文『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第九号、1987年9月)附録「永享三年本「東大寺縁起絵詞」翻刻」を参照。
 - 12) 藤田経世編『校刊美術史史料七大寺日記七大寺巡礼私記』(中央公論美術出版、2008年、p. 37.)より。
 - 13) 筒井英俊編『東大寺要録』(全国書房、1944年)「東大寺要録第四」、p. 90、諸院章一竊索院、6行目より。
 - 14) 中田祝夫『日本靈異記』中(講談社学術文庫、1987年、p. 165.)第21縁より。
 - 15) 『東大寺執金剛神縁起』と「白河院高野巡礼之日記」を指していることは間違いないところであるが、当時の一般庶民が参照出来る版本としてこれらが普及していたのかどうか疑問が残る。
 - 16) 萬納恵介『新薬師寺の寺号について』(奈良美術研究第15、2014年)「はじめに」など。
 - 17) 『南都名所集』巻六、新薬師寺の項「此仏の御目をきら／＼敷作られたり」。『和州寺社記』下、新薬師寺の項「本尊薬師如来の御目もきら／＼しく造らしめ給ふと云伝へし」。
 - 18) 引用する本文は、『日本彫刻史論集』(中央公論美術出版、1991年)所収、紺野敏文「新薬師寺の歴史」にある史料集 p. 216に翻刻掲載されているもの。この縁起については毛利久『近畿古文化叢書・新薬師寺考』(河原書店、1947年) p. 6に紹介されている。毛利は「近世に書かれたものであるから、勿論直に信憑すべきものではないが、縁起の末に「惣而是依国史及旧記。集其綱領作為之」とあり、縁起の全文を通じてみるに、中には右にいふ如く、確実な史料によって書かれた部分も可成り多くあり、これを一概に捨去ることも出来ないやうである」と書いている。
 - 19) 注5にある奈良奉行川路聖謨の日記『寧府紀事』(『川路聖謨文書』2~5(日本史籍協会、1933年)には眉間寺のことが再三言及される。それを読むと当時の眉間寺の姿が彷彿としてくる。一部を引用する。
弘化3年4月21日条「眉間寺へ参る。本堂の舞臺體のところより奈良の町々奉行所等或は笠置金剛山三笠山等よくみゆる。山々打つゝなら峯より峯のかさなりしはみとり成浪の嶢嶢なるに似たり(この寺眺望山の古名ありしといふ左もあるべし)寶物をみるよろしきも多くありこの住持實に眞言律なりとみえてあまり偽のあらぬ也(後略)」
弘化4年正月20日条「眉間寺へ参る 聖武帝の御陵ある歌によむ佐保山也。至て見はらしよしこの住持惣門の外に出迎ふこと例のこし。この住持なら中の学識ある清僧の聞ある老僧也。東大寺の學頭をするといふ也(後略)」
 - 20) 『唐大和上東征伝』(西尾市 岩瀬文庫 140-53) 23画面。
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100150123/viewer/23>
其年四月初於廬舎那仏殿前立戒壇天皇初登壇受菩薩戒次皇后皇太子亦登壇受戒尋為沙弥澄修等四百四十余人受授戒又奮大僧靈福賢璟志忠善頂道縁平徳忍基善謝行潜行忍等八十余僧。奮戒重受和上所授之戒。
 - 21) 平城遷都1300年記念『奈良の古寺と仏像』図録(三井記念美術館、2010年)解説 p. 244、31阿弥陀如来坐像より。『奈良六大寺大観』第11巻東大寺3(岩波書店、2000年)解説 p. 35の同像の解説では鎌倉時代初期前後の作と推定しているが、ここではより新しい知見を採用した。
 - 22) 『奈良六大寺大観』第11巻東大寺3(岩波書店、2000年)解説 p. 35下段には引用文献として『佐保山眉間寺住持次第考』とあるが、『大和志料』に引かれている『佐保山眉間寺住持次第考』とは同じ文献であると考える。
 - 23) 国立国会図書館デジタルコレクション『国史大系』第5巻(経済雑誌社、1897年)「日本紀略後篇3」

- 村上天皇, pp. 867-885.
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991095>
- 24) 藤巻和宏「東大寺四聖本地説の成立」(『伝承文学研究』54, 2004年12月, pp. 29-41.)
 同「東大寺縁起と『三宝絵』」(『三宝絵を読む』吉川弘文館, 2008年2月所収, pp. 256-275.)
- 25) 国立国会図書館デジタルコレクション『南都巡礼記・解説』(侯爵前田家育徳財団, 1940年)
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1115562>
- 26) 注11参照。
- 27) 小松茂美編著『続々日本絵巻大成』伝記・縁起篇6「東大寺大仏殿縁起・二月堂縁起」(中央公論社, 1994年8月)所収、小松茂美「天文年中における東大寺の絵巻づくり」参照。
- 28) 早稲田大学図書館蔵 ハ04 03889
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ha04/ha04_03889/index.html
- 29) 『奈良市歴史調査報告書』15(平成10年度)「筒井家史料」の史料番号718に「明治25年11月15日筒井家譜(一紙)塚田武馬」とある。この内容は同報告書の調査概要に要約されている。また同家譜について、吉海直人「『絵図屋庄八』追考」(『同志社女子大学総合文化研究所紀要』14, 1997年3月)に委しく書かれている。また年譜の作者塚田武馬について吉海は同論文の中で「士族であること、五峯穩士と称していることの他は未詳」であるが、「筒井家と密接にかかわっていること」そして「明治二十年代における奈良の名士」であろうと推測している。
- 30) おかげ参りの余波による奈良町のにぎわいについては『奈良市史通史』三(1988年)第三章第四節生活の動揺 おかげ参りと奈良 pp. 270-283に依っている。
- 31) 案内人の口伝などを記した文書は、未だ発見されていないようだ。絵図屋の前身である井筒屋版行の『大和名所記』は本文のほとんどが平仮名で書かれている。これは案内人の口上の台本が冊子化されたものではないか、と筆者は想像している。また時代は下るが、明治25年(1892)11月24日再版印刷の刊記がある鳥居武平著作『奈良名所案内詞』(購文堂)の本文は案内人の口上そのままを文章に移したかのようなものである。例えば96番新薬師寺の記述は「当寺は聖武天皇御眼病の御祈願の為に御建立なつたであります。其利益の新なる故に新薬師寺と名づけたるものでござる云々」とある。
- 32) 加藤基樹氏は「近世寺社縁起の戦略性」(注5)の中で、このような状況について「近世には「寺社縁起」を管理する主体(語る者)が「近世出版文化」の隆盛に伴い「縁起を語れる」という「こと」が、一山内部(寺社)から外部(世俗社会)へ離れ、流出するという現象(霊性世俗化現象)が生じる。(中略)一山外部に社会的通俗的「縁起」理解が形成し蔓延することで、幕府の寺院統制(「御免勸化願」を想定)や民衆の参詣に影響し、近世寺社の盛衰にも影響するものであったと思われる。」と述べている。これが実態だとすると、絵図屋庄八は『改正絵入』出版にあたり、東大寺・春日社・興福寺・他の寺院の縁起を(恐らく東大寺監修のもとで)統合

し、奈良の外部に敢えて流出させることで、却って奈良の霊性を担保しイメージを高めるだろうという見通しを持っていたのではないかと、筆者は考えている。

- 33) 注1『略縁起集の世界 論考と全目録』の「略縁起所在目録の編纂」を参照すると、全国の図書館・大学図書館・宮内庁書陵部・国会図書館などに所蔵される社寺縁起綴・略縁起集・神社仏閣縁起集の類の中に『改正絵入南都名所記』の名を数多く発見できる。近世から近代にかけて略縁起の蒐集・集成を試みた人々には『改正絵入』は略縁起の一つとして認識されていたことがわかる。

※参照したURLの最終確認日は2022年11月30日である。